

1) 八丁堀の名物

幕末まで町奉行所与力をつとめた原胤昭氏が、明治後期の「江戸時代文化」という雑誌に掲載した「江戸町方与力家庭の年中行事」の雛祭りの項に、八丁堀の名物だったという仁杉家の雛道具について述べている。

この中で

仁杉の雛道具、原の台所道具という名物があって、諸方から伝ツテを求めてお雛様を拝見に来た。

仁杉氏は先年日本橋区長もし、また日本橋区選出の東京市会議員でもあった仁杉英氏の家である。英氏の祖先が数寄（*風流）で、古来家蔵の小雛道具を、追年工夫を凝らして、種々な道具を製造させたものだ。

原の台所道具も、やっぱり同じ時代に造らせた小雛道具であった。糸柱（まさめ）桐の箱で、前扉を左右に開くと、幅四尺、高さ一尺、奥行八寸の台所となる。

料理場、上は流し、下は、流し、水桶・手桶・小桶・半切り、米櫃、かまど・銅鉦（く）七輪、戸棚・膳棚に、膳部椀（わん）・皿・茶碗、茶器・重箱・食器かご、庖丁、箆（ざる）かご、また料理台に載る魚類、野菜類の模造品、一切のものが造られてあった。

（中略）

両家の珍品が現存してあったら、江戸研究の先輩方には嘸（さぞ）喜んでいただけたように思いますが、残念なことには、私方のは、先年私が旅行中、託しておいた人の不注意で悉（ことごと）く散失してしまいました。

この稿を書くにあたって、仁杉氏の珍品の存否を探し出し、ご所有者・柿沼石蔵家に伺いましたら、すぐご婦人のお電話で、あの震災（関東大震災）にも無難であったと承りました。私は死んだ子に会ったようにうれしく感じました。いずれそのうちにはお飾り付けを願って拝見したいと存じています。（後略）

とある。



この雛道具の写真が八右衛門家の後裔である世田谷の仁杉家に残されていた。（左写真）

この写真を見ると、上段の内裏雛は有職雛であるが、いわゆる「雛人形」ではなく、刀・鏡・楽器・食器など、あらゆる道具100点以上を揃えた「雛道具」であり、精巧に作られた美術品であることがわかる。

ホームページ「仁杉家出自考」

に掲載されたこの雛道具の写真を見た雛道具研究家の川内由美子氏から連絡があり、この雛道具が現存していることがわかり、その数奇な運命が明らかになった。

2) 雛道具の遍歴

この雛道具は天保期の作品で、川内氏によれば天保 12 年（1841）ごろのものではないかという。

この当時、与力仁杉家は 2 家あった。

ひとつは本家の五郎左衛門、与力のトップ年番方・支配与力であった。もうひとつは分家の八右衛門家 2 代目幸雄、若手ながら奉行所では花形の詮議方（吟味方）を勤めていた。

雛道具をどちらの仁杉家が手にいれたのか、不明であるが、家作一軒分にも相当するという雛道具を買うほどの力があったのは本家の五郎左衛門であったと考えられる。しかし、この雛道具が大家または大身旗本家からの贈答品だとすると、吟味方与力だった八右衛門が入手した可能性も否定できない。

現在までに発見されている史料ではどちらが収集した雛道具であるか、特定はできない。

五郎左衛門は、天保飢饉の時のお救い米事件に連座して収獄、天保 13 年（1842）に獄死、

与力本家は改易となっており、先祖から伝わった家宝類は分家に引き継がれているので、どちらが入手したとしても、その後は八右衛門家の所有であったと考えられる。

原胤昭氏の文章に書かれた幕末から明治にかけての仁杉家当主は 3 代目八右衛門幸昌である。幸昌の時代に明治維新を迎え、その後は 4 代目、英の所有となった。

2-1) 柿沼家へ

明治になって雛道具は八右衛門家 4 代目当主の英が所有していたが、明治後期に実業家柿沼正蔵の手に渡っている。英は日本橋区会議員、東京市会議員、衆議院議員などの度重なる選挙で、相当の金を使ったと思われるが、この雛道具はそれらの選挙資金の一部になったのかも知れない。柿沼は綿糸の商い、紡績業で財をなした人で、英とは同じ日本橋区選出の市会議員仲間でもあったので譲渡の話が成立したのであろう。

ところが、柿沼家も大正後期には繊維不況などで家勢が傾き始め、大正後期から昭和初期にかけて一千点以上にも上る美術品などが何回かに分けて処分された。

昭和 6 年（1931）6 月、谷蔵の息子柿沼正造が、父谷蔵の蒐集美術品 490 点とともに、この雛道具一式も芝区愛宕下町の東京美術倶楽部で売立（競売）されることになった。



東京美術倶楽部は、明治 40 年 4 月、株式会社東京美術倶楽部として設立されている。維新後、衰微していた美術品の取引が、明治の中頃になり漸く活発になり始めた。明治 25 年、星ヶ岡茶寮で入札会が大々的に行われ、その後も同所や日本橋の福井楼、両

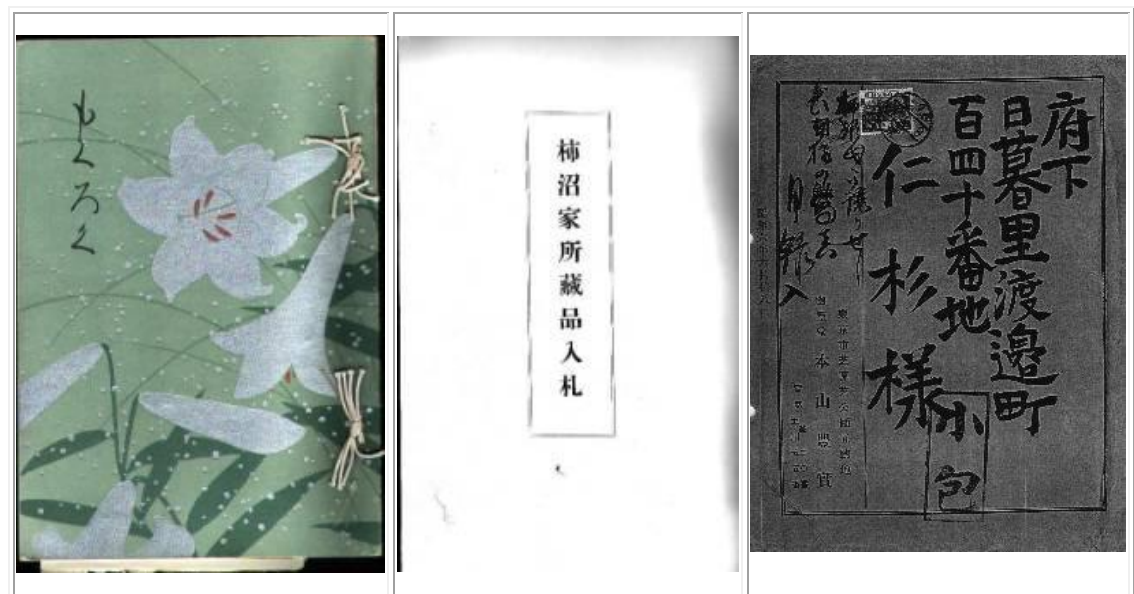
国の中村楼、上野の桜雲台、松源楼、伊香保の料亭などを会場として取引が行われていたが、貸会場での美術品売買に不便を感じ、両国河畔の料亭中村楼（旧伊勢平楼）が売りに出されたのを機に、美術商の専用建物とする為買い取り、株式会社東京美術倶楽部が東京市本所区元町1番地に設立された。

この建物が大正12年9月の関東大震災により全焼したので、芝区愛宕下町4丁目5番地の服部金太郎氏邸跡（旧柳生但馬守上屋敷跡）に移転した。

昭和12年11月、鉄筋コンクリート造3階建の社屋が新築落成したが、戦争がはじまり、昭和18年3月から海軍監督官事務所として徴用されたため、仮事務所に移転した。このことが幸いし、戦時中も戦火を免れ、戦後の美術業界の拠点として、その発展に寄与することが出来たという。

「仁杉家の難道具」の売り立てはこの建物で行われた。6月20、21日が競売品の下見にあてられ、翌22日に入札が行われている。札元は芝区芝公園5号地の幽篁堂本山豊実であった。

昭和12年までの美術倶楽部	現在の建物
	



この時の目録につけられた写真が冒頭の白黒写真である。おそらく柿沼家が前の持ち主である仁杉家に「売り出します」という連絡とともに、目録や写真を送ってきたのであろう。

この時の小包の宛名書き（写真上右）も残っており、日付は売立の直前の昭和5年（1832）6月18日となっている。

左上に「柿沼氏に御譲りせしお雛様の写真目録入り」という添え書きが見える。

2-2) 長尾家へ

この売立で雛道具を手に入れたのは、有名な「わかもと」で財をなした長尾よね女史であった。

白崎秀雄著「当世畸人伝」によれば、わかもとの製造は、昭和4年（1929）芝大門脇の寺の庫裏で、13人のパート女工を使って始められた。

畳に卓袱台のような台を置き、その上で作業が行われ、よねが割烹着、襷がけで女工達を監督し、菓が出来たら風呂敷に包み、担いで売りに出た。原料はビールの絞り粕で、乳幼児の栄養不足を補い消化を助ける薬として雑誌「婦人倶楽部」に広告を出したのがきっかけで爆発的に全国的に売れるようになった。

一年後には巨額の利益を出し、世田谷に広大な邸宅を買い、美術・骨董・刀剣を買うようになった。雛道具の売り立てが行われた東京美術倶楽部は会社の近くで頻繁に出入りしていた。

さらに当世畸人伝には

一なにかを美しい、面白いと感ずる感覚の卓抜さと決断の速やかさにおいて、彼女はほとんど稀有の人だったのではあるまいか。無論財力がなくては買えないが、財力があり古美術骨董が好きではあっても、内容の粗末な収集は世に挙げて数えるにたえない。

とある。

よねは当時の骨董界で有名な存在となった。その対象は特定の分野にこだわることなく、専門家やその道の目利きに相談することも怠らなかった。よねが手に入れた物の中には、現在MOA美術館所蔵の仁清の藤壺（国宝）もある。

この雛道具が飾られた前で近衛文麿などが酒を酌み交わしたという話もある。

昭和19年（1944）の空襲で「わかもと」本社を焼失する前に多くの美術品は13万坪もあったという鎌倉の別荘の地下に移され難を逃れる。

戦後、財産税が新設され、それを避けるために別荘を財団法人長尾美術館とし、国宝級・重文級の品も多数あったといわれている美術品、骨董品が展示された。この雛道具もこの長尾美術館に収められていた。

しかし、「わかもと」の東京の工場が焼け、敗戦で中国国内の工場がなくなり、しかし長尾家はさらに凋落して、長尾美術館を支えきれなくなり、昭和25年（1950）から2、3年の間に美術品のほとんどが美術商の手を経て各地の美術館やコレクターに散らばっていった。この雛道具は長尾家から東京・板橋の弁護士所有となった。弁護士料の代わりにこの雛道具が渡されたという。

2-3) 海外へ

その後、この雛道具は東京・虎ノ門の古美術店・南蛮堂に買取られ、その一部が店先に展示された。

昭和59(1984)5月12日。この雛道具を見た現所蔵者(静岡県在住)のMさんが一目で気に入ってしまった。Mさんは昭和20年(1945)3月、東京大空襲で飾っていたままで雛人形を失ってしまい、何とか自分の眼にかなう一式を探していたという。

南蛮堂には色々な雛人形、雛道具があったが、より「小さきもの」にこだわるMさんは、この雛道具を是非欲しいと思った。しかしお金の都合もあったので、その時はあきらめざるを得なかったが、戦後、多くの美術品が海外に流出してしまっているのも、「もう日本から出さないで・・・。」と店主に頼んで帰宅した。

4日後の16日の朝10時、店の希望額の現金を用意して南蛮堂に出向いたMさんは、この短い間に、雛道具が売れてしまった事を知り愕然とする。それも米国・フロリダ在住のA氏夫妻が買ったのだ。

そして5月22日、「雛道具」は米国に渡った。後で知ったことだが、A氏の来日の目的は、この雛道具購入だったといい、車椅子のA氏は帰国する時、雛道具を手荷物として預けず膝の上に載せて搭乗し、ファーストクラスの隣席をこの雛道具のためにとったという。

あきらめられないMさんはA氏の住所を店に聞くが教えてくれない。方々を尋ね歩き、ようやくわかった住所に

「手放す時は知らせて」

と手紙を書いた。

ほどなくして、A氏から

「売却する時は第一に知らせる。しかし約束は出来ない。」

昭和62年(1987)7月、某誌で南蛮堂の櫓時計の写真を見つけた。店主があこの雛道具の中から抜き出して、ドイツのコレクターに売ったと語っていたものだ。早速南蛮堂に電話して確認し、これを買求めた。

店主は

「この時計が、別れたアメリカの雛道具を引き寄せて、またあなたの所で一緒になるだろう。」

と言ってくれた。

平成元年(1989)、A氏夫妻が来日し、Mさんの自宅に1泊した。櫓時計を見に来たのだが、お互いに雛道具のことには一言も触れなかった。

平成3年(1991)、A氏に手紙を書いた。これで最後、だめだったらあきらめよう、という気持だった。

2-4) 里帰り、現所有者へ

平成4年(1992)7月25日、A氏から手紙が来た。

「2、3の美術館から譲って欲しいと望まれたが、あなたに先に知らせる。購入希望ならすぐ送金を」

とある。Mさんは早速、購入の旨を連絡し、8月5日に送金を完了した。

8月23日夕刻、雛道具は日通のマイアミ支店の倉庫に入った。その翌日、フロリダは巨大ハリケーンアンドリューに襲われ、心配したが、雛道具もA氏夫妻も無事だった。

9月12日、雛道具は日通の原木航空貨物センターに到着の報せがあったが、通関で問題が発生した。

「この雛道具が日本製であるという表示がない。日本製であることを証明できなければ輸入品として関税対象になる。」

というのだ。

日本で作られたものであることを証明できる人を探したが、なかなか見つからない。いろいろな人にあたった後、ようやく某美術館館長で国立博物館でも研究していた山邊知行氏の協力が得られることになった。

10月4日、山邊氏の鑑定書類などを揃えて税関に提出し、10月9日、ようやく税関を通った。実に日本に着いてから通関するのに一ヶ月近くかかってしまったのだ。



古美術店の店主が予言したように、ここに櫓時計を含めて18年ぶりに里帰りが実現し、雛道具一式が揃った訳である。

平成6年(1994)、フロリダの夫妻が飾られた雛道具を見に来日した。実はフロリダでは一度も箱から出して飾ったことがなかったという。左はMさんが撮影した里帰り後の写真

である。

まさに流転の運命をたどった雛道具である。

その後「仁杉氏出自考」、八丁堀での講演会、四番町歴史民俗資料館での写真展示などで紹介されることはあっても、実物が公開されることはなかった。しかし平成23年5月17日、Mさんのご好意、川内さんのご尽力で、再びその姿を我々の前に現した。

170年の星霜を経ているが、その精緻で豪華な造りは今もまったく色あせていない。



3) 専門家の考察

川内氏によると有職雛が武家や公家でない家にあることは非常に稀であり、この雛人形の男雛の装束は小直衣（狩衣直衣）立烏帽子、女雛は小袷、袴だという。

墨絵の雛屏風には「行年六十六可菴武清筆」の署名があるということである。「可菴」は喜多武清の号、武清は安永5年（1776）の生まれで66歳は天保12年（1841）となる。このことから川内氏は天保12年ごろの作と判断している。喜多武清は八丁堀に住み、羽黒山の「於竹大日如来縁起」の絵巻の画家の一人、安政3年（1856）81歳で死亡した。

この雛道具は点数が多いが、分類すると次のようになる。

七澤屋製

屏風 香道具類 小箆筥 姿見 伏香 髪台 火鉢 食籠 重箱類 懸盤 見台
菓子重

大きめの一式

三宝 菱台 刀かけ 花手桶 貝桶 机 書物箆筥 冠台 文台 百人一首 三
棚 台子 茶道具 煎茶道具 衣桁 箆筥 長持 挟箱 定家文庫 唐櫃 藤葛
枕 砧 柄鏡 鏡立 手拭掛 角盥 耳盥 盥 三面揃 蓑盆 提蓑盆 台火
鉢 行器 櫛台 蠅帳

どちらでもない

卜占道具 几帳 銚子 犬筥 螺鈿雲形盆 楽器 扇子 行灯 櫓時計？

これらの雛道具の中で、特に卜占道具、櫓時計、煎茶道具、楽器などが珍しく、海を

越えてドイツまで渡った櫓時計は一丁天符で実際に動き点鐘もチンと鳴る。

川内氏によれば、この雛道具は始め裕福な公家か旗本家で誂えたものを、後に仁杉家が譲り受けたのではないかという。



櫓時計

時計が雛道具に入っていたのは幕末・明治の短い期間だけ。もしかしたら特別に時計屋に注文したのかもしれない。



楽器類

署名があるので雛道具というより極上の細工物、楽器の雛形として作られた物ではないか。